

**<論文>明治28年の子規：許六『俳諧問答』への子規書き込み評の研究**

著者	岩崎 淳子
雑誌名	日本文學誌要
巻	52
ページ	42-53
発行年	1995-07-08
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019843">http://hdl.handle.net/10114/00019843</a>

# 明治28年の子規

——許六『俳諧問答』への子規書き込み評の研究——

岩崎 淳子

## 一・明治28年の社会状況と子規

明治28年は29歳の子規にとって極めて重要な年であった。前年8月日本は清国に宣戦布告し、日清戦争に突入していた。当時、子規は新聞『日本』の社員であったが、この新聞の創始者は、明治21年頃からはじまっていた日本主義運動の中心メンバーの一人である陸羯南であった。彼のナショナリズムは、排他的・盲目的愛国主義ではなく、むしろそれを否定し、「後進民族の近代化運動が外国勢力に対する国民的独立と内における国民的自由の確立という二重の課題を負うことによって、デモクラシーとナショナリズムの結合を必然ならしめる」(丸山眞男「陸羯南——人と思想」昭和22年『中央公論』2月号)ものであった。中学時代、自由民権思想に影響を受け、政治家を志したところのある子規は、羯南の思想に共感し、羯南もまた子規を高く評価していた。

戦局が激しさを増すにつれて、日本新聞社からも従軍するものが相次ぎ、『日本』紙上も従軍記事が多くを飾るようになっていった。子規

は「雄心勃勃として難禁」（きんじがたく）、従軍の希望を強く抱くのであるが、明治22年に肺結核が発病しており、希望は叶えられそうにはなかった。また『日本』は、民権擁護のために政府批判をすることも多かったもので、しばしば発売禁止となり、そうした事態に備えるため、その代行紙として刊行された『小日本』の編集に全力を投球していたのであるが、明治27年7月『小日本』は、わずか5ヶ月で廃刊に追い込まれた。子規は「煩悶の極」（「癡祭書屋俳句帖抄上巻を出版するに就きて思ひつきたる所をいふ」明治35）という精神状態に陥りながら、毎日、根岸の郊外を散歩し、俳句を書きつけた。後に子規はこの頃のことを「世は日清戦争にいそがしく、わが身を委ねし事業は忽に倒れ、わが友は多くいくさに従ひて朝鮮に支那に渡りし頃の其秋なりき。此時専らわが心を動かせしは新聞紙上の戦報にして、吾はいかにしてか従軍せんとのみ思へり。されどわが経歴とわが健康とはわが此願ひを許さるべくもあらねば、人にもいはず、ひとり心のみ悩ましつゝ、日毎に郊外散歩をこゝろみたり。一冊の手帳と一本の鉛筆とは写生の道具にして、吾は写生的俳句をものせんとて、眼に映るあらゆるものを捕へて十七字に捏ねあげんとす。わが俳境のいくば

くか進歩せし如く思ひしは此時にして、さ思ふにつけて猶面白ければ総てのうさを忘れて同じ道をさまよふめり」(「車上所」見明治31)と回想し、「写生的の妙味は此時に始めてわかつた様な心持がして」(「癡祭書屋俳句帖」抄序、明治35)と記している。

こうして明治28年を迎えた子規は、ついに従軍志願の意を表明するに至るが、「たの侍みがたき病軀を抱いて千載一遇の好機に際会し、徒に内地にあつて光陰を消費するに堪えず、前年来の不平と雄心のはげ場を従軍に求めたのであつた」(柴田宵曲『評伝』正岡子規)。もちろん周囲からは強い反対があつたが、子規は屈せず、従軍記者として近衛軍に従い、渡清することになった。それは五百木瓢亭宛書簡に「皆にとめられ候へども雄飛の心難抑終に出発と定まり候。生来希有の快事に候。小生今までにて最も嬉しきもの」と書き送るほどの喜びようであつた。ところが、3月6日、念願かなつて渡清のために広島まで来たものの、清国講和使節として下関に来ていた李鴻章が3月24日に狙撃され、更に一変して休戦となるなど、広島滞在はひと月以上になったが、ともかく子規らは大連を目指し海城丸に乗船した。五月十日、一発の砲声も聞くことのないまま、日清講和条約が批准されるまで、子規は金州城を見学したり、芝居を見たり、同じく従軍していた中村不折、河東可全、久松伯などを訪ねたりしている。彼は従軍記者に対する待遇をめぐって軍部と対立していたが、おそらくそれとも関係して、五月四日には軍医部長をしていた鷗外を訪ね、これより子規が帰国の途につくまで一週間ほど毎日、訪問して俳事を談じ、別れに際しては、几董の歌仙一卷の手写本を贈っている。(注1)金州での見聞が後の子規の作品に反映していることを考え合わせてみても、戦線を目のあたりにすることはなかったとはいえ、文学的収穫の大きい、意義ある一ヶ月であつたとい

える。

ところが帰国の船中で子規は激しく咯血し、瀕死の状態で神戸病院に入り、更に須磨保養院に移ることとなる。これらの事情は、ここで考察しようとする許六の『俳諧問答』版本への子規書き込み評に詳しいので、その識語をまずみていきたい。識語には、日付け入りのものと再識との二つがある。ここでは後者を引用する(読解の便のため、仮りに句読点を打つ)。

余満州ニ往キ、居ルコト一ヶ月ニシテ、帰国ス。船中、宿痾ヲ発シ、起居自在ナラズ。僅カニ神戸病院ニ入ルヲ得タリ。在院六旬ニ涉ツテ無聊ニ堪ヘズ、俳句ヲ以テ悶ヲ遣ルノミ。偶々松山ノ三鼠叔、人ニ托シテ、許六ノ俳諧問答五冊ヲ寄セラル。此書読マント欲シテ未ダ読マザル者ナリ。乃チ喜ンデ之ヲ読ム。先ヅ第一・第五両巻ヲ通読シ了リ、直チニ碧梧桐ニ托シテ、鳴雪翁ニ贈ル。後、病少シク愈エ、須磨ニ遊ブ間ニ乗ジテ、読過一二遍、読ムニ從ヒテ批評ヲ加フ。興至リテ夜ノ深クルヲ知ラザルコト屢々ナリ。他日之ヲ三鼠叔ニ呈シ、且ツ鳴雪翁ノ正ヲ請ハント欲ス。第一・第五両巻ハ再読ノ日、更ニ朱ヲ抹スベキナリ。癡祭書屋主人再識

ここからわかることを次にまとめてみる。

- ①満州からの船中で咯血し、神戸病院に二ヶ月ほど入院した。
- ②偶々、松山の岡村三鼠から人に托して『俳諧問答』五冊を送られた。
- ③読みたいと思っていたが読んでいない本だったので、喜んで先ず第一・第五巻を読んだ。その後、直ちに碧梧桐に頼んで内藤鳴雪に第一・第五巻を贈った。
- ④須磨保養院に移ってから二・三・四巻を精読し、批評を加えた。後に岡村三鼠に呈し、鳴雪の感想も聞きたいと考えた。

⑤第一・第五巻については再読のときに更に朱を加える予定である。

この評が加えられたのは識語に「明治廿八年七月廿九日 須磨保養院楼上ニ於テ」とあることから、須磨保養院へ移った7月23日から7月29日であると考えられる。再議を追ってみると、帰国のため乗船したのは5月14日であるので、「船中、宿痾ヲ発シ、起居自在ナラズ」とは、5月17日に咯血したことを指している。18日には下関に着いたが、船内で軍夫がコレラで死亡し、一週間の停船となるなどして、上陸したのは5月23日のことであった。その日の夕方、神戸病院に入院し、「六旬」すなわち二ヶ月の在院となるが、その間に母方の叔父で松風会のメンバーでもある岡村三鼠から『俳諧問答』五冊を送られた①②。五冊のうち、第一巻と第五巻を先に読んだのは、巻一はこの論争のきっかけとなったもの、すなわち問題提起であり、巻五は門人批評であって、中心は二・三・四巻にあるからではないかと思われる。その後、碧梧桐に頼んで両巻を内藤鳴雪に贈ったのは、6月4日から母八重と看病にあたっていた碧梧桐が、東京に帰った7月9日かと推測できる③。7月23日に神戸病院を退院し、須磨保養院で療養生活に入っているのも、この日から7月29日の間に、二・三・四巻を精読し、批評を加えたのであろう。かなり集中した激しい活動といわねばならない。この批評は、「他日之ヲ三鼠叔ニ呈シ、且ツ鳴雪翁ノ正ヲ請ハント欲ス」とみえるように、単に自分の批評をつけただけでなく、三鼠や鳴雪、おそらくは碧梧桐や虚子などにも見せることを念頭において書き入れた朱注であることがわかる④。更に第一・第五巻についても再読し、朱を加える予定であった⑤。

神戸病院や須磨保養院では、『俳諧問答』への書き入れのほかにも、『俳句分類』と共に進められた編纂事業の一つである「俳家全集」を取

り寄せ、古人の作品の点検をし、8月20日に須磨保養院を退院した後、漱石のもとに移ると、体調の悪化した9月26日まで毎晩、松風会のメンバー四、五人と運座を催し、句作指導を行うほか、連句もよく巻いている（『養痾雜記』、『日本』<sup>10</sup>）。この席には、しばしば漱石も加わった。このような日々の活動が、10月22日から「日本」に連載された『俳諧大要』にも大きく反映していると考えられる。子規は「芭蕉雜談」（明治26）の中で、「発句は文学なり、連俳は文学に非ず」と述べているが、これが必ずしも連句そのものの否定ではないこと、また、『俳諧大要』に「俳諧連歌」の項を設けているのは、決して付録的な意味あいや、「俳諧大要」であるための申し訳程度のものではないことは、こうした明治28年の子規の動向からも明らかなのである。<sup>（注2）</sup>

さてこのような緊迫した状況のもとで集中的に取り組んだ『俳諧問答』（法政大学図書）の理解、すなわち去来・許六の論争を通して、子規はどのように芭蕉俳諧と対決したか、それはまたどのように自己の文学創造と関連するのか、次に考察を進めたいと思う。

## 二. 『俳諧問答』書き込み評の考察

子規は『俳諧問答』を読みながら本文に○△の朱点を施し、ときには本文の訂正をし、上欄に朱注をつけている。どのような問題に対する朱注であるのか明示しながら整理しなおした結果、上欄朱注の数は69、句頭に付した○の数18、○の傍注20箇所、△の傍注42箇所、の傍注26箇所であった（このうち講談社の『子規全集』巻四（昭和50年）では傍注計29箇所。所が見落とされておられ、これらは特に後半に多いようである）。上欄朱注には、便宜上、順番に1から69の番号を付した（後述の一覧表参照）。

〔一〕『俳諧問答』の諸本と寛政版の構成及び子規藏本について

『俳諧問答』の諸本には、次の三種の区別がある。

一 自筆本(部分的に現存)、またその忠実な模写といわれる専宗寺蔵写本

二 天明五年刊、浩々舎芳磨校定『俳諧問答 青根か峰』半紙本五冊

三 寛政十二年刊、竹巢月居序『俳諧問答』半紙本五冊  
子規の手元にあったものは、この第三番目の寛政十二年版で、誤記・脱落の多い版本である。

寛政版の構成

卷一・贈晋氏其角書——不易・流行論から其角を論難した去来から其角宛ての書簡を、其角が改変して『未若葉』(元禄十年)の跋に載せたもの。許六は『菊の香』(風国編、元禄十年)所収のものから引用している。

贈落柿舎去来書——不易・流行論への許六の質疑。

答許子問難弁——去来の許六への返答(元禄十年十二月)。全三十五節。

卷二・再呈落柿舎書——許六の「答許子問難弁」に対する応答や質疑、風・体論を中心とした不易・流行についての再論。

全十三節(一つ書きを通算)。

俳諧自讀論上——許六の俳歴、芭蕉の血脉の相伝者であること、同門の集や自句・他句についての論。全六節(一つ書きを通算)。

卷三・俳諧自讀論下——俳諧自讀論上のつづき。特に句のてにはの用法、文法についての再論。全三十四節(一つ書きを通算)。

卷四・自得発明弁——取合せ論を中心とした許六の句作論。

全二十七節(一つ書きを通算)。

卷五・同門評判——蕉門諸門人の批評の諸論(元禄十一年三月)。全二十九節(一つ書きを通算)。

このうち、子規の書き込み評が二・三・四巻にあることは先に述べた通りである。

〔二〕子規書き込み評の特質

69箇の朱注は三種に分類される。一つは、書き込み成立の事情を語る跋文ともいうべき69番の朱注(前掲)。一つは、各巻の冒頭や巻末にある、その巻の総評。一つは、各々の語句や節に対する評注である。

A. 各巻の総論(二・三・四巻)

1 卷二・冒頭(本書創作の意図について)

許六、去来の返簡ヲ得テ、益隔靴搔痒ノ感ニ堪ヘズ、終ニ此長篇ヲ草シ、自己ノ高慢心ヲサラケ出シタリ。故ニ許六ハ隠密々々ト称シ、其实ハ此書ノ廣ク人目ニ觸レンコトヲ欲セリ。今や此書、梓ニ上リテ、世上ニ流布スルニ至ル。許六、地下に瞑スベシ。

『俳諧問答』創作意図についての評である。「許六、去来ノ返簡ヲ得テ、益隔靴搔痒ノ感ニ堪ヘズ」とは、卷一の贈落柿舎去来書に対する返答である答許子問難弁を指している。

31 卷二・裏表紙見返し(テキスト批判)

此書、幾人カノ騰写ヲ経シ者ト見エ、魯魚ノ誤リ、手尔葉ノ違ヒ、假名違ヒ等、甚ダ多シ。魯魚ノ誤リハ、読ムニ從ヒテ之ヲ正セシモ、其他ハ総テ筆ヲ加ヘズ。

テキスト(原本)についての批判をし、誤字脱字については訂正を加えたことを述べたもの。実際、6箇所に朱訂を施している。

47 卷三・裏表紙見返し（許六の文法力）

許六ノ文法ヲ論スル処、正々堂々、嘴ヲ入ル、ニ由ナシ。當時蕉門ノ弟子等、文法ニ精通スルコト、許六ニ及ブ者ナカルベシ。然レトモ文法ハ固定シテ動カザル者ニ非ズ。却テ時代ニヨリテ變遷スルヲ常トス。元禄ノ時ニ當リテ、文法違ヒノ俳句、続々トシテ出ヅルハ、已ニ文法ノ變ジタルナリ。然ラザレバ將ニ文法ノ變ゼントスルナリ。果セルカナ、明和安永ノ頃ニ至リテハ、俳句ノ多クハ（是レ、と書いて消す）、謂文法違ヒトナリタリ（タリ、を見せ消ち）。而シテ世人ハ、文法違ヒヲ以テ、之ヲ難ゼズ。寧ロ普通尋常ノ句トシテ、之ヲ恠マザル（ナリ、と書いて消す）ニ至レリ。然レドモ文法ノ變遷ノ可不可ニ至リテハ、修辭學、若シクハ心理學と關聯シテ論ズベキ者、敢テ一概ニ論判を消して論に改める）決スベカラズ。

子規は、卷三の朱注を中心に、てにはの使い方、切字、音調と意匠の混同、その他文法についての許六の誤りを指摘しており、特にこの47で、許六が文法に精通していることを指摘した上で、文法の変遷について述べ、修辭學や心理学の適応を示唆している点に注目すべきであろう。

67 卷四・二十四丁表文末余白（卷四の総評、許六の新しみ）

許六ハ常ニ輕ミト云ヒ、新シミト云ヒ、流行ト云フ。而シテ曾テ不易ノ句ニ論及セズ。盖シ渠ハ、流行ヲ見テ不易ヲ見ズ。輕ミ新シミヲ知テ、重ミ古ミヲ知ラザルナリ。

この評は必ずしも卷四と限定はできないけれども、卷四は去来の不易流行論を退け、許六が取合せ論を縦横に展開している所であるから、主に卷四の総評としてよいであろう。許六の特色を「輕み」「新しみ」

「流行」として捉え、62「許六の眼光、此ニ及ブ。渠亦、元禄ノ一俳家ナリ」と肯定的に捉えているが、また56「所謂月並調ナリ。然レトモ許六ハ之ヲ賞シテ、新シミトモ、輕ミトモ云フナリ」と子規が否定する月並調の源泉とも捉えていることがわかる。

68 卷四・二十四丁裏余白（卷二、四の精読総評、去来と許六の對比）

許六ノ着眼、能ク細微ニ及ブ。故ニ其論スル所、亦精密ニシテ、尋常俳家ノ耳ニ入り易カラズ。此點ニ於テハ、去来ト雖モ及バザル者アリ。況ンヤ其他ヲヤ。去来ハ大ナル処ニ得テ、小ナル処ニ足ラズ。許六ハ小ナル処ニ樂ンデ、大ナル処ニ入ラズ。故ニ句々相較スレバ、許六ニハ悪句少ク、去来ニハ悪句多シ。若シ古今ノ名句ヲ以テ論ジナバ、去来ニハ名句多ク、許六ニハ名句少シ。而シテ許六ハ終ニ一籌ヲ去来ニ輸ス。然レトモ連句ニ至リテハ未ダ精細ナル研覈ヲ經ズ。他日、詳論スル所アルベシ。（日付等、前掲、省略）

許六の着眼力の鋭さを去来と比較しながら指摘している。また、連句については研究不足を認め、他日の詳論を期すことを明らかにしている。

本文を読むにあたって、子規は常に去来・許六の論を冷静に分析し、評を加えようとしていることが、以上の各巻の総評からも察することができる。

版本への、△○点の注記と欄外の朱注を対照させ、原本から作成した資料（一九九四年度国文学会大会報告）は長大なため、ここでは簡略記した一覧表で全体を展望し、特徴的と思われる面のみ次に考察したい。

<p>子規書き込み評一覧</p> <p>〔算用数字1〜31は巻二、32〜47は巻三、48〜69は巻四、漢数字は丁を表し、表・裏はそれぞれオ・ウで示す。〕</p>	
<p>各巻の総評</p>	<p>肯定的見解</p>
<p>1・一オ (創意図)</p> <p>31・裏表紙見返し (本文批判)</p> <p>47・裏表紙見返し (文法力)</p> <p>67・二四オ文末 (巻四総評)</p> <p>68・二四ウ余白 (識語)</p> <p>69・裏表紙見返し (再識)</p>	<p>11・一三ウ 芭蕉俳諧の真髓</p> <p>12・一四オ 蕪村の其角評</p> <p>25・二二ウ 芭蕉の血脉相統</p> <p>40・一五ウ 許六の句評力</p> <p>48・一オ 題詠の秘訣</p> <p>(取合せ論)</p>
<p>許六の性格や人物に関する評</p>	<p>50・五ウ 初五の置き方</p> <p>(元禄調)</p> <p>51・六オ 古事・古実を結ぶ</p> <p>という論</p> <p>53・八オ 発句道具・平句道具・第三道具</p> <p>60・一九オ 許六の句評力</p> <p>62・二〇オ 許六の句評力</p>
<p>批判的な評</p>	
<p>2・三ウ 不易流行と風・体論</p> <p>4・七ウ 許六の覇氣と稚氣</p> <p>13・一四オ 血脉 (「先ヅ血脉ノ二字ヲ點出ス」)</p> <p>17・一五オ 芭蕉の許六評 (「許六ヲホメ過ギタル様ナリ」)</p>	

18・一八オ	血脉 (「邪路ニ入ル」)
19・一八ウ	許六が大成しない所以
20・一八ウ	血脉 (「ウルサシ」)
21・一九オ	血脉相統
22・一九ウ	血脉 (「益々解スベカラズ」)
23・二〇オ	許六の不易論批判
26・二二ウ	血脉 (「痴人、夢ヲ説クニ同ジ」)
27・二六オ	血脉からみた正秀・木導の句について
28・二七オ	許六の「炭俵」・「別座敷」理解
29・二七オ	許六の「冬の日」・「あら野」理解
30・二七ウ	許六の「あら野」・「炭俵」・「別座敷」理解
32・二ウ	文法 (「何風」の「何」について)
33・二ウ	句評 (何風の吹かぬ日おつる椿かな)
34・三オ	句評 (雨風のせぬ日もおつる椿かな)
35・三オ	「何風」の意味
36・八オ	句評 (とられずば名もなかるらん紅葉鮒)
38・一三オ	文法 (助動詞「はや」)
41・二〇オ	文法 (「恋し」は現在形)
43・二二ウ	句評 (から鮭のゑぞは古手で御慶哉)
45・二七オ	てにはと五音の響
46・二八オ	音調と意匠の混同
49・五ウ	句評 (田の草におはれくて)
52・七ウ	元禄俳諧の虚構性

54・八ウ	発句道具・平句道具
56・一〇ウ	許六の句評（軽み・新しみ）批判
57・一四ウ	歌評（西行・家隆）と芭蕉の鑑賞眼
58・一七オ	句評（白菊や目にたててみる塵もなし）
59・一八ウ	名人（芭蕉）の句作・推敲
61・一九ウ	等類・和歌評・許六の和歌引用
63・二〇ウ	てにはのまわらぬこと（等類）
65・二三オ	句評（立雲の南にしろし衣がへ）
67・二四オ	軽み・新しみ・不易流行論
肯定・否定どちらともつかない評、または両者を含む評	
3・六オ	芭蕉没後の俳諧に対する許六・去来の評価
5・八ウ	芭蕉の去来推薦
14・一四オ	芭蕉の許六を励ます言葉
15・一四ウ	芭蕉の許六評（「躍然トシテ紙上ニ在リ」）
16・一四ウ	芭蕉の許六評の真相
37・一三オ	一句に切字が二つあること
39・一五ウ	自句・他句の区別
42・二一ウ	等類の問題、許六の句と尚白の句
44・二六ウ	アクセントについて
55・九オ	歳旦三つ物仕様相伝
64・二二ウ	句評（初雪や <sup>△</sup> 払ひもあへずかい <sup>△</sup> つ <sup>△</sup> ぶり <sup>△</sup> ）
66・二三オ	句評（高取の城の寒さや <sup>△</sup> 芳野山 <sup>△</sup> ）

## B. 各問題に対する評

次に各問題に対する評のうち、特徴的なものについて、いくつか触れておきたい。

① 不易・流行論と風・体論（子規朱注2 巻二 再呈落柿舎書、十章の問答）

許六は贈落柿舎去来書において、句を作る前に不易・流行にとらわれるのは正しい句作の仕方ではないことを、歌人が歌を作る前に「十躰」のうち、何躰の歌を作るか考えるのではなく、できあがった歌を判者が判定することを例に引いて立証しようとした。それに対して去来は、答許子問難弁の中で「この語、雅兄のさす所異なり。躰と風とはたがひあり。まづ流行は風なり。十躰は躰なり。躰は古今に押<sup>お</sup>わりて用捨なし。風はときに用捨あり」と、不易流行という言葉は十躰とは異なるものであると反論した。去来が不易・流行とともに風であるとしたのに対し、許六は「今の不易・流行は俳諧の体なり」として、不易流行は体であると結論づけている。子規はこれを読んで「体ト云ヒ、風ト云フ、初ヨリ定義ヲ置カズ。故ニ二人ノ論點、皆肯綮ニ當ラズ。初二和歌ノ十体ヲ論ジ、後ニ俳諧ノ体（体用ノ体ノ意）ヲ論ズルガ如キ、体ノ字ニ驅ラレテ、自己ノ論點ヲ忘レタル者、古人ノ論、此種ノ誤謬極メテ多シ」と評し、和歌の論の安易な適用で俳諧の風・体について論じており、双方ともに風・体そのものの定義を怠っているために論点が肝心な所に及んでいないことを明確に指摘している。

② 芭蕉俳諧の神髓と其角・許六の俳諧について（朱注11・12 巻二 俳諧自讃論上）

子規は、許六・芭蕉・其角の俳諧の差異についての問答を読んで、次のように傍点と朱注を加えている。



また問云、「予が俳諧と晋子が俳諧と符合せざる事、并師の風雅と予が風雅と符合せし事を述べて、不審を明し給へ」といへば、師の云、「許子俳諧をすき出る時、閑寂にして山林にこもる心地するを悦び、元来はいかひ数寄ならずや」といへり。答曰、「しかり」。「師も好く所かくのごとし。晋子がすく所は、曾てこの趣にあらず。俳諧は伊達風流にして、作意の働き面白き物と、すき出たる違ひなり。故に晋子と許子と符合せざる」といへり。

朱注11 此語、蕉風俳諧ノ神髓ナリ。後世ノ蕉風ナル者、多ク邪路ニ落チタルト雖モ、ソレモ此閑寂ナド云フ處ヲ、踏ミ違ヘタルナリ。

朱注12 後年、蕪村ノ其角ヲ賞揚スル者、亦、此「伊達風流ニシテ作意ノ面白キ」処ニアルベシ。

朱注11の「此語」とは「閑寂にして山林にこもる心地するを悦」ぶことを指しており、子規が芭蕉俳諧の神髓を「閑寂」にみていることがわかる。これは、後に明治30年の『俳人蕪村』において、「芭蕉は俳句の上に消極の意匠を用うること多く、従つて後世芭蕉派と称する者また多くこれに倣ふ。その寂といひ、雅といひ、幽玄といひ、細みといひ、以て美の極となす者、尽く消極的ならざるはなし」と述べるのにつながつていくものと思われる。また、「閑寂にして山林にこもる心地するを悦」ぶとは、人事と自然とを考えると、自然に重きをおいたものとも考えられ、子規は「芭蕉、去来はむしろ天然に重きを置き、其角、嵐雪は人事を写さんとして端なく佶屈聲牙に陥り、あるいは人をしてこれを解するに苦ましむるに至る」（『俳人蕪村』人事的美）と述べている。芭蕉の句から、彼の俳諧の神髓を見極めていた子規は、許六が芭蕉の言葉として書き記したこの言葉を見て、更にその確信を

深めたにちがいない。

子規は「消極的美」に対し、「積極的美」とはその意匠の壮大、雄渾、勁健、艶麗、活潑、奇警なる者をい「う」としているが、「伊達風流にして作意の働き面白き物」は、この「積極的美」であるといえる。芭蕉は「俳句において美を発揮し、消極的の半面を開いたものの、「積極的美の半面はこれを開くに及ば」なかったのに対し、其角は漢語、古語を用い、「奇を求め」たのであり、体得することができずに終つたそれらの「積極的美」を、蕪村が初めて「自得した」という。「蕪村ノ其角ヲ賞揚スル者」については『俳人蕪村』に詳しいので引用しておく。

蕪村は『鬼貫句選』の跋にて其角、嵐雪、素堂、去来、鬼貫を五子と称し、『春泥集』の序にて其角、嵐雪、素堂、鬼貫を四老と称す。中にも蕪村は其角を推したらんと覚ゆ、「其角は俳中の李青蓮と呼ばれたるもの也」といひ「読むたびにあかず覚ゆ、これ角がまされる所也」ともいへり。しかもその欠点を挙げて「その集も閱するに大かた解しがたき句のみにてよきと思ふ句はまれなれり」といひ「百千の句のうちにてめでたしと聞ゆるは二十句にたらず覚ゆ」と評せり。

『俳人蕪村』は明治29年に草稿が成っているが、その骨格はすでに書き込みの行われた明治28年にはできあがつていたことが、朱注11・12によつてわかるのである。

### ③題詠について（朱注48 巻四 自得発明弁一）

……予か云、「我『あら野』『猿蓑』にて、此事を見出したり。予か案し様、たとえば題を箱に入れて、其箱の上にあかつて、箱をふまえ立あかつて、乾坤を尋る」といへり。師の云、「是也。さればこそ、

寒菊の隣もあるやいけ大根

といふ句は出る也」といへり。

朱注48 是レ題詠ノ秘訣ナリ。

この傍点と朱注は、明治28年10月からの『俳諧大要』にほぼこのままの形で載せられている。

## 『俳諧大要』第六 修学第二期

一、課題を得て空想上より俳句を得んとする時に、その課題もし難題なれば作者は苦吟の余見るに堪へざる拙句を為すこと、老練の人といへども往々免れざる所なり。『俳諧問答』なる書に許六の自得発明弁といふ文あり。その初に題詠の心得を記したり。曰く、

一、師の云、発句案ずる事諸門弟題号の中より案じいだす是なきものなり、余所より尋来ればさて沢山成事なりと云り、予が云、我『あら野』『猿蓑』にてこの事を見出したり、予が案じ様たとえば題を箱に入てその箱の上にあがりて箱をふまへ立ちあがつて乾坤を尋るといへり、云々と、けだしこれ題詠の秘訣なり。

これは許六俳論において血脉論と双璧をなすといわれる取合せ論である。この部分以下、自得発明弁の第一章は、ほぼ同文で『篇突』の「発句調鍊之弁」、『宇陀法師』の「巻頭并俳諧一卷の沙汰」にも載せられている。「題を箱に入てその箱の上にあがりて箱をふまへ立ちあがつて乾坤を尋る」とは、題材を箱の中に入れてその箱の上に上り、箱をふまえて立ちあがつて、題材の範囲内にとらわれず広く天地の間に別の題材を探し求める、という非常に合理的で、いかにも覇気のある表現である。これは芭蕉に「畫はとつて予が師とし」「師が畫は精神徹に入り、筆端妙をふるふ。その幽遠なるところ、予が見るところにあら

ず」と言わしめた画才やその理論とも深く関わっているものと思われる。このようにして子規は許六の取合せ論を摂取していたことがわかり、非常に興味深い。

### C. 朱点の打ち方について

ところで、子規が本文に加えた傍注、○△はそれぞれどのような意味を持つのであろうか。その注記と上欄朱注を関連させて考えてみると、ほぼ次のような意味を持つのではないかと思われる。

……読みながら、重要である、注目すべき所と思う箇所。

○……点をつけている時、特に注目すべき箇所、あるいはインデックスとしての意味。

△……問題がある、疑問である、という箇所。

これをふまえて、朱注・傍点をみていくと、巻二の俳諧自讃論に出てくる34箇の「血脉」という言葉について、最初の一箇所のみ○をつけ、その後は△を25箇所もつけて、批判的な注を加えている。これは同じ言葉について付した傍点では最も多く、非常に特徴的であるといえる。どのように理解したらよいのであろうか。次に考察する。

### 〔三〕子規の血脉論批判

『俳諧問答』二巻から四巻の中で、最初に「血脉」の語が出てくるのは、俳諧自讃論で許六が「予さぐりあたりたる所、まことの俳諧の血脉に侍るや」と芭蕉に問い、「この所、毛頭疑あるべからず。心を正して、俗はなるゝ外はなし」の答を得た箇所であり、子規は血脉の字に○の傍点をつけ、13「先づ血脉ノ二字ヲ點出ス」と書いている。以下、血脉について述べられていくが、二番目に出てきた「この句、秀たる句にあらずといへども、血脉の正數所よりいでゝ」の「血脉」には△をつけ、18「血脉ノ二字、已ニ邪路ニ入ル」と一蹴してしまう。

ここでは許六はまだ血脉について何の説明も加えていないのであるが、これ以後、血脉論の展開に従って子規は20「ウルサシ」と言い、血脉の語一つ一つに△印を付けていく。

血脉論とは、去来の不易流行という言葉は批評語たりえても、俳諧の底を抜いて自得する創造精神を語り得ないという許六の批判から生まれたものである。子規はある面で共感していたのであろう、たとえば芭蕉の血脉を論じては「却て師より遙かに増る名人と成るべし」と許六が言う時、25「此論、甚々善シ。只斯ク言フ許六ノ心底ハ取ラズ」と評する所にも表われている。ところが去来の不易流行論に對置して血脉相統を主張する所には、21「門前ノ捨児ヲ拾ヒアゲラレタリトハ知ラズ、血脉相統ノ実子ト思ヒ、親ノ名ヲ笠ニ着ル人ノアハレサヨ」と批判する。してみると許六を超えて、或は許六に對置して創造精神を主張しようとする子規の並み並みならぬ對決の姿勢が、一つ一つ労を厭わず「血脉」という語に△印を積み重ねていく行為に表われていると判断してよいのではないだろうか。血脉という言葉は、俳諧においては俳諧の伝統的な知識や故実などを非公開にして伝授し、まさに血統の正しいことを証明するもの、というのが一般の意であるし、許六の場合、芭蕉自筆の『白砂人集』を受け継いだことを公にしているので、あたかも秘伝書の伝授をもって得られるものと考えられても仕方のない面もある。また、實際蕉風においても内面的に深化した中世的な伝授思想があったのであろう。しかし、明治という開明の時代に生き、「開かれた信仰」のもとにすべてを捉えようとする子規にとって、そこにどのように深い意味があるかという方向には向かわなかった。血脉のもつ密室的・閉鎖的な性格は、偶像崇拜的・宗教的芭蕉信仰と同じく肯定できるものではなかったのである。前述したように、合理

的な取合せ論を受け入れ、閉鎖的な血脉論を否定したことを考えてみると、子規の血脉論批判の背景には、俳句革新にける意気込みが感じられるのである。

### 三. おわりに

明治時代の初期は、あらゆることに西欧化が進んでいた。文学もちろん例外ではない。当時の俳壇は幕末から俳諧人口が増し、俳諧はすっかり庶民に普及していた。その中で、芭蕉は神格化され、その俳諧は世俗化の一端をたどっていた。明治5年、政府は社会教化策として教導職を設け、俳諧の宗匠もこれに含まれていたが、俳諧は商業化し、懸賞などによって遊戯化されていた。また、三森幹雄の神道芭蕉派明倫教会のような俳諧の宗教化という事態もおきていた。そのような中で子規は、俳諧を西欧の文芸に匹敵するものにしたと考えたのであった。そのために、明治以前の俳諧を従来の評価をとり払って、改めて見直し、西欧文芸に對抗し得る日本独自の文芸として明確にしようとした。一見、痛烈な芭蕉批判ともとれる「芭蕉雑談」も『歌よみに与ふる書』における旧派の古今調批判も、こうした立場から説かれたものである。子規は「芭蕉雑談」の中で「発句は文学なり、連俳は文学に非ず」と述べているが、連俳は常に新しい世界を求めるので、前句との関わり方で別の意味になることを積極的に望むが、文芸を個性の表現とみる西欧的文芸観からすれば、作者の意図を顧ず、意味を変えることが望まれる連俳は、文芸として適さないことになるだろう。また子規は、連俳は感情よりも知識に属するものが多く、芭蕉が連俳に秀ているのも知識が多いからであるとしている。俳句革新について

いうならば、子規は虚飾を取り去って蕉風俳諧をみた上で、その自然愛と客観的写真とを結びつけて、西欧の文学に匹敵する新しい俳句の創造をめざしたのである。そして、この明治28年に熱中した連俳は、その新文学を生み出す運座の中に生き残ったということが出来るだろう。

明治28年8月下旬から9月下旬にかけて、熱心に子規のもとに集った一人に柳原極堂がいる。前年秋の写生的俳句の獲得と、こうした句作指導や運座の集まりが、その後、『俳諧大要』（明治28）『俳句問答』（明治29）へとつながり、更には日本派の形成や、極堂による『ホトトギス』の創刊（明治30）へと結びついたことを考え合わせてみると、明治28年は、子規の俳句革新に非常に重要な意味を持つ年であり、こうした中で行われた『俳諧問答』研究には、子規の新しい文学創造の情熱が集約されていると見る事ができるのである。

# 明治28（一八九五）年 子規（29歳）年表

※この年表は小論の理解に役立つと思われる事項のみをまとめたものである。

1月1日	「日本」に「俳諧と武事」を発表。
1月初旬	かねてから希望していた日清戦争従軍が決まる。
1月20日	吉田月我への返書に、「芭蕉雑談」を含めた『獺祭書屋俳話』の続篇を刊行準備中と記す。
3月6日	広島着。
3月24日	李鴻章が下関で狙撃される。

4月7日	藤野古白が拳銃自殺を図る。
4月10日	海城丸に乗船。
4月17日	日清講和条約締結。
4月24日	近衛師団附記者の待遇の劣悪さを参謀管理部長に質するが、記者は無位無官兵卒同様と言われる。帰国を決意。
4月28日	「日本」に「陣中日記」の連載始まる。
5月4日	軍医部長の森鷗外を訪ね、俳諧を談ず。これ以後、金州を去るまで毎日訪ねる。
5月10日	鷗外を訪ね、別れに几董の歌仙一巻の手写本を贈る（森鷗外『徂征日記』参照）。
5月17日	船上で咯血。
5月23日	和田岬上陸。県立神戸病院に入院。「病床日誌」始まる。
5月28日	漱石からの病氣見舞と松山での教師生活報告の書簡着。
6月4日	母八重と河東碧梧桐が病院に着き、以後看病にあたる。
6月20日	内藤鳴雪の書簡（十八日付）。食欲あり。「しきりに俳想生じ発句四、五十作る」。
7月9日	八重と碧梧桐が帰京する。（↓『俳諧問答』一・五巻を碧梧桐に托し鳴雪に贈った日か。）
7月23日	神戸病院を退院し、須磨保養院へ移る。
7月29日	『俳諧問答』に評語を書き込み、跋文を記す（二・三・四巻）。
8月10日	鳴雪への書簡に、俳句批評、ひまにまかせて『源氏物語』須磨の巻を読んでいることなどを記す。
8月20日	須磨保養院を退院。
8月25日	「日本」に「養痾雜記」の連載を始める。

8月27日	漱石のもとへ移る（以後五十余日）。
8月28日	松風会会員の句作指導受諾。
9月	毎晩四・五人の松風会員が部屋に集まり、運座を催す。
9月5日	『増補再版瀬祭書屋俳話』刊行。
10月22日	「日本」に『俳諧大要』の連載始まる。
12月12日	「日本」の読者に『俳諧大要』の問い合わせの返書を送る。

注一 講談社版『子規全集』第12巻月報 宮地伸一「子規と鷗外の出会い」において、両者の出会いは初めて解明された。

注二 野山嘉正「正岡子規『芭蕉雑談』の周辺」（『国文学解釈と鑑賞』昭和62・5）に「『俳諧大要』の尾部に連俳の作法の解説と召波十三回追悼会の半歌仙を収めてあることもやや唐突に見え……、入門書という弁疏をもつてしておお敷い難いものがあると言わざるを得ない」と言われているが、明治28年の子規の連俳熱からみてそうではないだろうと思う。

後記 小論は一九九四年七月九日、国文学会大会において、法政大学図書館蔵子規文庫調査の一環として口頭発表したものを吟味しなおしたものである。

（いわさき あつこ・修士課程一年）